



～ 第 22 回パッションフルーツ品評会の審査講評 ～

今年のパッションフルーツ栽培は、気候こそ例年並みではありましたが、新梢の伸長異常や着花不良といった生育障害が発生し、特に秋頃の栽培管理に大変なご苦労があったことと思います。しかし、例年と同様に、高品質な果実が収穫されており、ひとえに生産者の皆様のきめ細かな栽培管理とこれまで培われた経験や技術の賜物であると感じています。

今年度の品評会は、5月29日に農産物観光直売所会議室において開催され、農協、小笠原村、小笠原支庁産業課、亜熱帯農業センター及び母島営農研修所の各職員、計7名が審査員を務めました。出品数は全9点で、いずれも母島からの出品でした。審査項目は、果実の形状や光沢、熟度、品質の揃い、傷の有無や消費者ニーズ等の商品性とし、これらを総合的に評価しました。

今回の品評会は、パッションフルーツ最盛期の実施で優れた品質のものが多くあり、審査に苦慮しました。その中でも、金賞を受賞した出品物は、形状、光沢、着色の揃いがいずれも特に申し分なく、他と比較しても傑出していました。銀賞や銅賞を受賞した出品物も着色程度と光沢のバランスが良く素晴ら

しい逸品でしたが、形状の僅かな不揃いが見られたことが金賞との差になりました。その他の出品物も上位に匹敵し、甲乙つけがたく素晴らしい良品であり、また全体的に大玉かつ高重量の傾向にありました。一方で、熟度のムラ、果実下部付近に若干の汚れや傷がある出品物も一部で見られましたので、次年度に出品の際はご配慮いただければ幸いです。

小笠原パッションフルーツは島内外から人気が高く、来島した観光客はもちろん、5年ぶりの開催となった「島じまん」では早々に完売となるなど、内地の特産品販売イベントでも大変好評を博しています。こうした高品質なパッションフルーツを生産する高い技術力を有し、丁寧な栽培管理を行っている生産者に敬意を表するとともに、今後益々のブランド価値向上を期待しています。

<所長：境>



写真 金賞 松本農園の出品物

金賞	小笠原村長賞	母島	松	本	農園
銀賞	小笠原支庁長賞	母島	小松	朗生	農園
銅賞	農協組合長賞	母島	小松	武人	農園

～小笠原諸島の植生回復のための取り組み～ オガサワラグワ苗木の根洗いの検討

小笠原諸島の固有種であるオガサワラグワは絶滅の危機に瀕しているため、増殖して植栽することを検討しています。これまでに、オガサワラグワの組織培養技術や順化方法を明らかにしてきました。しかし、弟島等由来の株を父島等で増殖させ、弟島等へ植栽する際には、シロアリやウズムシ等の土壤動物の持込みが懸念されることから、苗の根洗いをして土壤を取り除く必要があります。そこで、オガサワラグワの苗が根洗いをしても障害が起きないかを明らかにしました。

●試験方法

1. 組織培養したオガサワラグワを小笠原赤色土表層土（赤土）に移植し、順化後3年経過した苗木を供試しました。「根洗い+運搬処理」として、苗木の根部の土を落とし30分程度水に浸漬して根を洗い、濡らした紙タオルに包んでビニール袋に入れました。運搬を想定してリュックサックに入れ、日陰で半日程度保存した後、赤土入りの鉢に植え替えました。この「根洗い+運搬処理」と赤土入りの鉢に植えたままの「無処理」について、28日後までの生育を比較しました。

2. 根洗いから植え付けまでの気温と樹体温を測定しました。更に、根洗い中に現れた大型土壤動物（体長2mm以上）を、肉眼で観察し記録しました。

●結果

1. 「根洗い+運搬処理」で、枝や芽・葉等に障害は確認されず、「無処理」と同様に

順調に生育しました。

2. 気温は夜間22℃、日中25℃程度（1月に試験実施）で、樹体温は気温と終始同値で推移しました。このような環境であれば、輸送に耐えることが分かりました。

根洗いで観察された土壤動物は、9株でミズ類1匹でした。土壤動物の混入は組織培養後、鉢に植え替えて順化する際に地面に接地していたことが原因と考えられます。したがって、苗土壤の土壤動物の侵入を防ぐためには、地面から離して管理する必要があると考えられ、根洗いして根が乾かないように運搬して植えつければ、半日程度土壤の無いままにしても、オガサワラグワ3年生株は衰弱せず、順調に生育することがわかりました。

<自生種担当：蜷木>



図. 根洗いと保存時の様子

今年度の農業者セミナーの開催について

今年度の農業者セミナーは11月頃にカンキツの剪定、12月頃に農業を行う上での栽培方法等の基礎知識について実施する予定です。なお、詳細につきましては「村民だより」などでお知らせします。ぜひご参加ください。

～アフリカマイマイの分布調査結果～

アフリカマイマイの発生動向を明らかにするため、1985年から父島と母島で2～4年ごと（2004年以降は2年ごと）に分布調査を行っています。今回は2022年の調査結果を報告します。

アフリカマイマイの行動が活発な5～6月に、父島48地点、母島50地点で生存貝発見及び生息密度を調査しました。その結果、生存貝は、父島3地点（発見率6.3%、前回調査時3地点）、母島28地点（発見率58.0%、前回調査時32地点）で発見され、母島では前回の調査（2020年）より減少していました（図2）。

また、各調査地点のアフリカマイマイ発見効率を調べる生息密度では、父島0.016個体/分（前回0.026個体/分）、母島0.34個体/分（前回0.55個体/分）であり、共に減少していました（図3）。

これらから父島と母島では依然としてアフリカマイマイの生息は確認されるものの、この2年間で母島では生息域の縮小と生息密度の減少を確認することができました。

引き続きアフリカマイマイ防除対策の参考とするため、継続的に調査を行っていきます。
 <病害虫担当：遠藤>

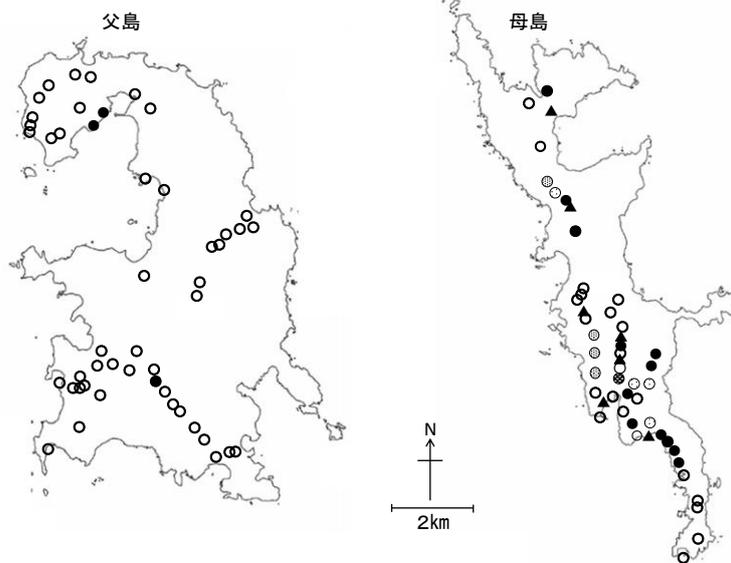


図1 父島と母島におけるアフリカマイマイの生貝分布ならびに各調査地点での生息密度
 ○：0，▲：0<～≤0.1，●：0.1<～≤0.5，⊖：0.5<～≤1，⊕：1<～≤2，⊗：2<～（個体/分）

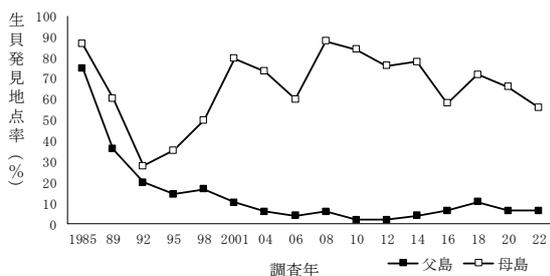


図2 アフリカマイマイ生貝発見地点率の推移（1985～2022年）

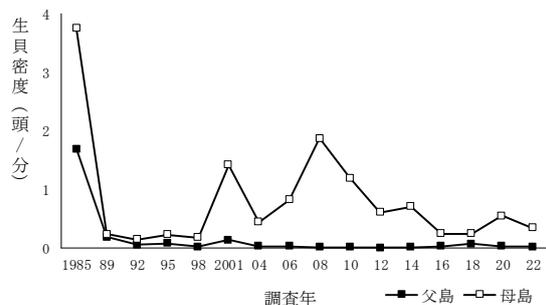


図3 アフリカマイマイ生息密度の推移（1985～2022年）

～ 土壌診断の傾向と対策 ～

トマト栽培後の5月とパッションフルーツ栽培後の7月に、農協からの依頼に基づき、土壌診断を実施しました。改良対策は個別にお知らせしましたが、ここでは全体的な傾向と対策について報告します。

診断数は2回を合計して、母島21戸99件、父島9戸45件でした。皆様の継続した施肥改善によって、バランスのとれた土壌が大半を占めてきています。一方で、以下のような状態の圃場がありました。

●低pH

小笠原のトマトやパッションフルーツ栽培は長期にわたります。肥料の副成分ももちろん影響しますが、アルカリ性を示す成分が長期の栽培で吸収されたり、灌水で流亡したりすることによっても低pH化を招きます。しかし、この場合は次作前に石灰等の資材を施用することで改善が可能です。施用しすぎは高pH化を招きますので、土壌診断結果を基に石灰投入量を計算しましょう。石灰資材は植物に被害を与えるガスが出ることがありますので、植付の1か月以上前に施用し、施肥と同時にはしないようにしましょう。また、未熟な有機物を大量に投入すると、窒素飢餓が起こるだけでなく、二酸化炭素や有機酸が大量に放出され、土壌pHが低下することがありますので注意しましょう。

●高pH

主に石灰資材の施用しすぎが原因です。土壌がアルカリ性に偏り過ぎると、土壌中の栄養成分の溶解性や可給性が変わり、栄養過剰や欠乏が発生することがあります。一般的には作物が吸収するのを待つしかありませんので、石灰資材の施用を控え、毎年の土壌診断を受け、徐々に減らしましょう。

●リン酸、カリ過剰

肥料のやりすぎが原因です。リン酸やカリが過剰な圃場では、14-14-14等の3成分が入った肥料等を使わず、硫安・過石・硫酸加里などの単肥に切り替え、過剰な成分は減らして施肥しましょう。

また、栽培間にソルガム等を栽培し、圃場外に持ち出す方法もあります(クリーニングクロープ)。圃場にすき込むと、過剰成分も戻ってしまうので、必ず持ち出します。

●苦土過剰

小笠原の土は母材の影響で苦土が高くなっています。特に新規に耕作する土地では高い傾向にあります。土壌診断結果で不足と判明した圃場以外は施用を控えましょう。「苦土」や「マグ」と付く肥料だけでなく、緩効性肥料のI B化成にも含まれています。

作物が吸収するのを待つしかありませんので、毎年の土壌診断で残量を確認しながら、徐々に減らしていきましょう。

●3回目の土壌診断

レモン収穫後となる11月最終週から、3回目の土壌診断試料の受付を行います。

希望される方は、お知らせや採取袋に記載した事項をよく確認し、農協窓口までご提出ください。結果は1月10日以降に、ご提出された窓口で返却予定です。

土壌診断を活用して、自分の圃場に肥料成分がどれほど残っているかを確認することが大切です。施肥や土づくり、土壌診断等で分からないことがあれば、農協窓口や営農研修所、農業センターまでご相談ください。

<営農研修所：北山>